

コーチングをベースにアクティブ・ラーニング を取り入れた学級活動 (LHR) の試み

— 自己決定活動から「心の居場所のある学級づくり」へ —

有馬 義秀*, 前田 美香**, 瀧山 完二***

Effects of active learning approach to homeroom activities, guided by coaching method
— For the construction of desirable human relations in a classroom
through decision-making activities —

Yoshihide Arima*, Mika Maeda** and Kanji Takiyama***

生徒指導の目標である「自己指導能力」の育成は、「自己存在感」、「共感的理解」、「自己決定」を促進する学級活動 (LHR) での話し合い活動や協同学習によって育成されると考える。さらに、自己決定の結論が確かな実践力を伴って、生徒達の日々の生活レベルを向上させていくのではないかと考えられる。この問題意識から、教育コーチングの手法による教師の指導の下、学活 (LHR) 実行委員会において課題設定や討議の柱決め等の事前協議を行い、学級活動 (LHR) では、アクティブ・ラーニングを取り入れた生徒主導の主体的・対話的な話し合い活動を展開させることが望ましい人間関係の構築や自己指導能力の向上に寄与するという仮説を設定し、実証研究を行った。検証の結果、生徒達は期待に添う変容を見せ、学級活動 (LHR) における生徒主体の話し合い活動がコミュニケーション能力を伸ばし、心の居場所のある温かい学級へと改善していくことが分かった。また、学力向上への好影響も期待できる結果となった。

Key Words: 「中高等学校, 特別活動, 学級活動 (LHR), アクティブ・ラーニング, 望ましい人間関係

(Received September 11, 2017)

1 はじめに

平成29年3月に公示された「新学習指導要領」特別活動の中で、学級活動の目標を、「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の

* 鹿児島純心女子短期大学英語科 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

** 鹿児島市立甲東中学校 (〒892-0845 鹿児島市樋之口町4-38)

*** 鹿児島県立加治木高等学校 (〒899-5214 始良市加治木町仮屋町211)

生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。」としている。そして、育成する資質・能力を次のように規定している。

知識・技能に関しては、多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。

思考力・判断力・表現力等では、集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。

そして、学びに向かう力・人間性等については、自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う、としている。

特別活動はこれまでも進路指導や生徒指導の大切な指導場面として重視されては来ているが、全国学力・学習状況調査の質問紙調査において、「学級会などの時間に友達同士で話し合っただけで学級のきまりなどを決めていこうと思う」と肯定的に回答している児童生徒の方が、全ての教科で平均正答率が高い傾向にあることから、いかに児童生徒主体の自己決定の流れを重視した学級活動(LHR)が教科指導面を含めた学校生活の重要な基盤になっているかが見て取れる。

このように、特別活動における集団活動は、集団への所属感、連帯感を育み、それが学級文化、学校文化の醸成へとつながり、各学校の特色ある教育活動の展開を可能としており、このような特別活動は、我が国の教育課程の特徴として、海外からも高い評価を受けている。(中央教育審議会答申)

2 研究の背景的課題や問題意識

更なる充実が期待される特別活動における今後の課題を、中央教育審議会答申では以下のよう
に指摘する。「特別活動においては、「なすことによって学ぶ」ということが重視され、各
学校で特色ある取組が進められている一方で、各活動において身に付けるべき資質・能力
は何か、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につながるのかという
ことが必ずしも意識されないまま指導が行われてきた実態も見られる。特別活動の時間
において育成する資質・能力だけでなく、特別活動が各教科等の学びの基盤となるとい
う面もあり、教育課程全体における特別活動の役割、機能も明らかにする必要がある。」

このことを教育現場の実態から見ると、「なすことによって学ぶ」特別活動、殊に学級活動・
ロングホームルーム活動で、進路指導や生徒指導の成果を効率よく求めようとするあまり、
教師主導の活動になりすぎていないかという問題が指摘できる。生徒達が自ら課題を見だし、
役割を分担して解決するために話し合い、合意形成し、自主的に企画運営していく学級活動
(LHR)に取り組むことを通して特別活動の目的は達成されるはずであるから、現状の教師主
導の学級活動(LHR)では真の成果はあまり望めないのではないかと考えられる。

上記の課題を整理して、改善するための視点を以下のように考えた。

- ① 学活(LHR)における生徒の意見表明や議論のレベル、話し合い活動を自ら展開する
ためのコミュニケーション能力等が、これまでと比べてあまり向上していないのではない

か。いや、むしろ低下していないか。

- ② 今、求められているこれからの生きる力となる「主体的・対話的で深い学び」に通じる学活（LHR）になっているのか。このテーマに一番迫りやすいのは、教科指導の前にまずこの学活（LHR）ではないのか。生徒主体のアクティブ・ラーニング型話し合い活動を日常的に経験した学級の生徒達は、教科面でのアクティブ・ラーニングにもよりよく取り組んでいかないか。
- ③ 生徒指導の究極の目標である「自己指導能力」や「自己指導的態度」の育成は、まさにこの「自己存在感」,「共感的理解」,「自己決定」を促進する学活（LHR）での話し合い活動や協同学習によって育成されるのではないか。さらに、その話し合い活動で生み出された自己決定の結論が確かな実践力を伴って、生徒達の日々の生活レベルを向上させていくのではないか。
ここで言う自己指導能力とは、「与えられたさまざまな課題の遂行・達成、つまり人間の価値の習得・実現に向かって自分で自分自身を方向付けるとともに、自己の直面する問題を自分で解決する能力」のことを指す。このような能力を育成する最高の舞台が学級活動（LHR）ではないか。
- ④ 教育コーチングの手法である「傾聴」,「質問」,「承認」は、学級活動（LHR）の事前、事後の教師によるリーダー養成の段階、つまり学活（LHR）の準備段階での討議の柱作り、班編制、結論に導く話し合いの流し方や実践化の方法等の協議から、学活（LHR）本番の教師、生徒同士のあり方に至るまで、即応できる素晴らしい手法ではないか。
- ⑤ 望ましい人間関係構築力が脆弱といわれる最近の子ども達が、本音で意見や考えを交換し合い、認め合い、助け合って成長していくために、生徒主体のアクティブ・ラーニング型話し合い活動こそを、この学級活動（LHR）に取り入れる時ではないか。

3 研究仮説

教育コーチングの手法により、学活（LHR）実行委員会において課題設定や討議の柱決め、会の回し方等の事前協議を工夫・準備させるとともに、学級活動（LHR）では、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた生徒主導の主体的・対話的な話し合い活動を展開させることにより、自己決定に向けた活発な話し合い活動が行われ、実践化への議論が深まり、望ましい人間関係の構築や自己指導能力の向上に寄与するであろう。

4 研究の方法

- ① 鹿児島県総合教育センター制作の「学校楽しいーと」を利用して、対象生徒の実態把握とプレ・ポストの調査を行い、1学期間の研究実践での生徒の変容をみる。
- ② 望ましい人間関係の育成に関する理論研究に基づき、学活（LHR）における効果的なコーチング、構成的グループエンカウンターやアクティブ・ラーニングの手法を研究・工夫する。
- ③ 研究協力者の勤務校である中学校2学年1クラスと高校3学年1クラスで、研究実践を1学期

間の6時間～10時間程度を行い、仮説を検証するとともに、アクティブ・ラーニング型指導やコーチングの有効性を検討する。授業実践後には、生徒の発言や態度の変容、リフレクションシートへの記述等を基にした検証と考察を行う。

5 研究内容

(1) コーチングに支えられたアクティブ・ラーニング型学級活動 (LHR) の工夫

教育コーチングは、コミュニケーションを通して生徒が本来持っている意欲と能力を引き出し、目標達成とその先にある自立を支援するメソッドである。教育コーチである教師は「寄り添う案内人」として、傾聴・質問・承認の姿勢で対話を続け、生徒の思いや疑問、願いを引き出していく。学級活動 (LHR) における生徒自らの自己決定への協働的活動は、生徒一人ひとりの自己存在感を醸成し、他者との共感的人間関係の構築に大きく寄与していく。

教師は、コーチングにより、教師主導の学級活動 (LHR) から生徒が全てリードする生徒主体の学級活動 (LHR) への転換を図る必要がある。教師はコーチャーとして生徒の考えを引き出し、考えを深め、ほめる・認めることに意を用い、生徒が主体的協働的に問題解決に向け前進していくことを支援していくのである。

アクティブ・ラーニング型授業は、「問い」に満ちた授業である。問いを通して課題と向き合い、自分と向き合う体験である。この問いこそが話し合い活動における「討議の柱」であり、その問いそのものを生徒自らが考え、適切なものに練っていく。従って、事前の学活 (LHR) 実行委員会での話し合いは学級活動 (LHR) そのものの質を決定づけるほど重要なものであり、担任教師としてのコーチングがものを言う場面である。週に1回は次週の学級活動 (LHR) に向け、放課後等に会議を持ちたい。

しかし、残念ながら、ほとんどの学級活動 (LHR) が教師主導の授業になっており、生徒が自ら考え、行動し、意見をぶつけ合い、仲間と協力して問題の解決に向け、主体的・対話的で深い学びになるはずの時間になっていないのが現状である。

(2) アクティブ・ラーニングを構造化する協同学習

鈴木は、Johnson, D. W. らの提唱する協同学習の成立条件を次のように整理している。

- ① グループやクラスの仲間が学習を促進するために、互恵的に協力しあう安心・安全の関係である。
- ② それに伴い、仲間同士が援助したり、励まし合ったりする活発な対話がある。
- ③ グループの学びが個人の学びであり、個人の学びがグループの学びであると言える責任を果たしていく。
- ④ 協同学習の技法の活用方法や、傾聴・質問・承認など対話の社会的なスキルについての訓練がある。
- ⑤ グループ活動のプロセスについての振り返りの時間が保障されている。

そのため、学級活動 (LHR) の基本的な学習形態を、各グループ4名ずつの班に分け、班討議にかけられた討議の柱に対する考えを、まず個人で書き出す段階を重視する。書くという作

業は思考や発想，感情を可視化・言語化する作業であり，漠然とした思いを明確にする行為である。これは思考力・判断力・表現力を鍛える良い機会であり，メタ認知能力を高める作用もある。アクティブ・ラーニングのシンク・ペア・シェアの最初に当たるこのシンクの内容を書き出す作業は個人の責任において成されるべき活動である。そのために自分の考えを書き出し，発表に備える「レディネスシート」を配付して思考の見える化と事後評価への活用を図る。

グループワークでは，各班に班長を一人決める。班長は班の議論をリードしたり，まとめたりする役割であり，学活（LHR）実行委員会のメンバーにもなって，事前会議でしっかりと話し合い活動の全体方向を把握する責任を負う。ただし，グループ発表の段階では，班員だれが当たっても発表できるような体制にして，全員参加の自覚を促す。

クラス発表では，全体に対して各班の意見や考えを発表する。全体の考えを収斂したり，比較したり，KJ法でカテゴリー別に分類したりしながら討議を進展させる。特に中学生の場合，発表内容の板書に時間がかかりすぎることがあり，班討議の内容をポスターセッションのアイデアで，「班ポスター」として各1枚に書き出し，発表の際は即座に黒板に張り出す工夫を取り入れることで話し合いの時間をより多く確保する。

(3) 学級活動（LHR）の質を決める鍵

これまでの学級活動（LHR）には，生徒同士が主体的に進める対話がかかなり不足している。これからは学級に「対話の文化」を築いていくことが肝要である。ロジャーズは，「自分について関心を持たれている，大切にされている，認められている，理解されている，愛されている，と実感したとき，人は自己成長力を発揮する。」と述べている。そのような学級活動（LHR）であれば，生徒の意欲，主体性，能動性はぐっと高くなる。質の高いアクティブ・ラーニング型学級活動（LHR）を展開しているクラスは対話力が高い。そしてそれが教科学習にも転移する可能性は高いと考えられる。

そこで，学級活動（LHR）に取り組む生徒達に，鈴木の主張を参考に，以下の5項目の呼びかけを行うことにした。

- ① 意見の違いを大切にしよう。
- ② コミュニケーションを楽しめる人であろう。
- ③ 簡単には納得しないで，根拠・理由に興味を持とう。
- ④ 他者から学ぼうとする姿勢を大切にしよう。
- ⑤ 納得できる他人の意見を取り込んで自分の意見を改善しよう。

これらの訓練は，アサーション・トレーニングや構成的グループエンカウンターにおける学級活動（LHR）時，及び話し合い活動時に繰り返し想起させ，「傾聴」と「自己開示」がスムーズに進む積極的な対話へと誘うようにした。

(4) 事前・事後の学活（LHR）実行委員会で周到的準備と反省

- ① 学活（LHR）実行委員と仕事の分担（10名）
司会：総務，副司会：副総務
ノート書記と黒板書記：学活（ホームルーム）委員等

各班長：班会議をリードし、意見を集約する。(中6名、高6名)

② 事前の学活 (LHR) 実行委員会で決めておくこと

ア 話し合う議題をより興味のあるタイトルにする。

イ 議題の提案理由を考えて、発表できるようにしておく。(司会)

ウ 話し合いのめあてを考え、班討議、全体討議の「討議の柱」を決める。

特に実践化に向けて、質の高い話し合い活動ができるように誘う。

◎討議の柱の例「学級目標を決めよう。」司会、班長が全てリードする。

・クラスの良いところ、悪いところは何か。

・特に、改善したい所は何か。

・どうしたら改善できると思いますか。

・明日から即実行したいことを具体的に提案してください。

・最終的に実行すべき点を二つ決めたいと思います。理由を添えて。

・次の2点を明日から実行することに決しましたが、それがちゃんと実行されているかどうかやってチェックしますか。守られていない場合、どんなペナルティを科しますか。

エ 話し合い活動が活発化するために、事前のアンケートやモチベーションを高めるDVD、手記、経験談などの準備を学活 (LHR) 実行委員会で検討する。

オ 班長が班討論をしっかりとリードできるように理解を深める。

カ どの討議の柱を班討議に、どの柱を全体討議にするのかを決めておく。

キ 決まった事の発表 (司会) と先生の話

③ 事後の学活 (LHR) 実行委員会では、リフレクションシートを集約して反省・総括を行い、次の話し合い活動に生かす。

(5) 話し合い活動の手順

① はじめの言葉

② 議題の確認と提案理由の説明

③ 目当てと話し合う内容の確認

④ 班や全体での話し合い

⑤ 意見の集約

⑥ 決まったことの発表

⑦ 先生の話

⑧ リフレクションシートの記入

⑨ 終わりの言葉

(6) 意見の見える化、活性化を図るために

① レディネスシート・班ポスターの活用 (班討議)

ア シンク・ペア・シェア方式で議論を進める。

・一人で思考し、レディネスシートに書き出す。

・ペアで思考を深める。質問しあう。

- ・班での決定（KJ法）後，結論を班ポスターに記入する。
 - ・それを基に，学級全体の議論へ発展させる。
- ② ラウンドロビン方式で議論を深める。
個人で思考後，班で一人ずつアイデアや意見を出す。ブレストーミング風に行く。それを班ポスターにまとめ，全体に発表する。
- ③ サイコドラマで疑似体験を行い，問題をより深く考える。
例えば，いじめの場面等を実際にロールプレイングで演じ合い，主人公の心の声を補助自我役が演じるなどして，いじめる側やいじめられる側のそれぞれの思いや心の痛みなどを具体的に理解することにより，より深い気づきや学びへと導くことができる。

6 実践事例 1

研究対象：鹿児島市立甲東中学校2年1組

指導者：前田美香教諭

(1) 学級の実態（4月当初）

男子11名（交流学級生1名含む），女子18名，計29名の学級である。主に三つの小学校（松原小・山下小・城南小）から本校へ進学してくる。

2年生になり，新しい学級で夢や目標に向かって，熱心に学習や部活動，生徒会活動等に取り組んでいる生徒もいる反面，将来の目標や夢中になれることが見つからずに中だるみの傾向を見せている生徒もいた。小学校が本校より小規模であったりするため，クラス替えに対応できずに，不安を訴える生徒や，落ち着いて行動できなくなる生徒の姿が見られた。また，コミュニケーション能力に乏しい生徒が多く，些細なことでも生徒同士お互いに声かけすることなく教師や保護者にすぐ頼ってくる姿が多く見られた。教科担当者からも，授業中に落ち着きがなく，学習意欲の高い生徒の妨げとなる行動が数多く見られると悩みを相談されることもあった。

(2) 研究実践の流れ

話し合い活動を中心に8回実践を行った。学級目標を決定する話し合い活動を行った際，お互いの意見を述べる・聞き合うスキルの不足が見られたため，グループエンカウンターやアサーショントレーニングを取り入れ，生徒のコミュニケーション能力の向上を図った。

1	4月8日	構成的グループエンカウンターによる自己紹介活動
2	4月10日	話し合い活動「学級目標の決定」
3	4月20日	構成的グループエンカウンター「お互いのことをもっと知ろう」
4	5月18日	相手の気持ちを考え，自分の気持ちを伝えよう
5	5月25日	話し合い活動「学級目標の具体策」
6	6月15日	話し合い活動「合唱コンクールに向けて」
7	6月20日	話し合い活動「いじめについて」
8	7月6日（実証授業）	話し合い活動 ～望ましい人間関係～ 「合唱コンクール本番で最高の合唱をしよう」

(3) 話し合い活動のための事前・事後会議

話し合い活動の前には学活実行委員会を前日の始業前の時間に行った。参加メンバーは、議長(総務)・副議長(副総務)・書記・記録係・各班長(6名)である。アンケートの結果を全員で確認しながら、議題提案の理由を検討し、今回の話し合いの柱は何にするのかを議論・決定し、話し合いの場面での班長の役割について等を確認した。担任は、実行委員会でも、生徒の考えがうまくまとまっていくようにコーチングに徹した。ここで、大まかな話し合い活動の流れについて全員で確認することができたため、班長が欠席の場合でも、お互いサポートし合いながら話し合い活動を円滑に進めることができた。また、班長は席替えごとに各グループで決定したため、多くの生徒が班長を経験することができ、話し合い活動の回数が増えるごとに班長をサポートしながら話し合い活動を行うことができるようになっていった。

事後会議は議長・副議長・書記の3人と担任で放課後に行った。今回の話し合いの良かった点・改善点を確認し、次の話し合い活動へつなげていくことができた。第一回の話し合い活動の後に、書記の板書に時間がかかることが課題としてあげられた。そこで、話し合い活動の時間確保のために、レディネスシート(図1)、班ポスター(図2)を活用することを事後会議で決定した。また、決定事項の呼びかけ方法などを検討し、帰りの会などを使って共通実践事項を繰り返し意識づける活動につなげることができた。



図1 レディネスシート



図2 班ポスター

(4) 話し合い活動の実際 (7月6日 (木) 2校時 9:50~10:40)

- ① 題材 望ましい人間関係「合唱コンクール本番で最高の合唱をしよう」
- ② 主題設定の理由

合唱コンクールは1学期の行事の中では最も大きなものであり、学級への所属感や連帯感を深め、仲間意識を高める絶好の機会である。しかし、学級の実態としては、指揮者・伴奏者・パートリーダーがリーダーシップを発揮し、積極的に取り組もうとする生徒がいる反面、自己中心的な考え方で、周りの意欲に水を差すような発言をしてしまう生徒も見受けられる。さらに、自分の意見はもっていても、「リーダーがやればいだろう」と人任せにする生徒も少なくない。そこで、良好な人間関係を築き、学級目標であるUnion「団結」の実践に向けて本題材を設定した。

③ 指導の過程

時期	活動内容	活動の実際
6月中旬	【学活】 ・話し合い活動 「合唱コンクールに向けて」	○ 各グループで、合唱コンクールに向け、団結して練習する姿をイメージし、それに近づくための実践目標をグループごとに決定した。

7月 3日	【アンケート】 ・話し合い活動「合唱コンクールに向けて」で決定した目標の取り組み状況についてのアンケート実施。	○ アンケートを集約し、6つの目標の中から、どの項目が実施できていないかを確認した。
7月 4日	【学活実行委員会】 ・アンケートの結果から、次時の話し合い活動の柱の設定、流れの検討を行った。	○ アンケートの結果から、「友達がきちんとできていないときに注意ができない。」ことが課題であることを確認し、そのためにどのような声かけをすべきかを話し合うことを決定した。 ○ リハーサルのビデオを授業の中で観ることについて、抵抗があるとの意見があり、どのようにすれば、みんなが安心して自分の合唱に専念して視聴できるかを考える時間を設けることにした。 ○ 合唱コンクールの本番が成功しているイメージを事前会議で検討し、「笑顔」で合唱を終えるための合い言葉を決めることを決定した。
7月 6日	【実証授業】・話し合い活動 「最高の合唱コンクール本番にしよう」	※④ 本時の展開結果参照
7月 6日	【事後会議】 ・放課後事後会議	○ 本日の話し合い活動を振り返り、本番に向けて、学級のリーダーとして全体を前向きにする言葉かけをするように、確認をした。
7月 9日	【合唱コンクール】 ・本番終了後SHR	○ 各リーダーから、今回の合唱コンクールの取り組みについて総括を行った。どのリーダーも周りの協力に対する感謝の言葉を述べていた。
7月 10日	【1学期の学活を振り返って】 ・1学期の学活を振り返ってのリフレクションシートの記入	○ 1学期を振り返って、話し合い活動を通して、自分たちでどのようなことができるようになったのかをリフレクションシートに記入した。

④ 本時の展開結果

過程	活動の内容	生徒の動き・反応	教師の評価
意識化 5分	1 本時の活動のねらいを知る。	○ 議長がアンケートの結果から提案理由を説明した。	・ 本番直前であり、議長の提案をしっかりと聞いていた。
追求 40分	2 リハーサルのビデオを観るための心構えについて、個人で考え、グループの話し合いで意見をまとめる。	○ 班長が中心となり、話し合いを進めた。 ○ 「悪いところだけに着目しない」など、相手を思いやる行動を取ろうとする意見が多かった。	・ 話し合い活動にも慣れ、スムーズに話し合いに入っていた。当日班長が病気で欠席したグループもあったが、リーダーを経験したことがある生徒が臨機応変に対応していた。
	3 歌っている姿で失敗している場面を想定し、ロールプレイを行う。	○ ロールプレイの実演後、グループで意見を集約し、一つの意見にまとめた。 ○ 相手のできていないことをせめるのではなく、本番に向けてこうしていけば良いという前向きな意見が多かった。	・ 練習中はお互いをせめる場面が多かったが、話し合い活動によって、気をつけるポイントを全員で共通認識を持つことができたことで、前向きな発言に変わってきた。

	<p>4 リハーサルのビデオを観て、お互いの良いところを伝え合う。</p> <p>5 合唱コンクールに向けてのポジティブ合い言葉を考え、発表する。</p>	<p>○ リハーサルのビデオを観て、グループのメンバーの良いところをレディネスシートに記入し、伝え合った。</p> <p>○ ロールプレイで考えたことをもとに、お互いに前向きになるコメントを伝え合っていた。</p> <p>○ グループで「笑顔」を含めた合唱コンクールの合い言葉を決定した。</p> <p>○ お互いの考えを伝え合い、それぞれのグループで学級を盛り上げる6種類の合い言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 響かせよう！世界に一つだけの合唱 ・ 笑顔 金賞 春祭 女子 男子 みんなで春祭つかむんだ オー！ ・ 全力で笑顔で歌う ・ 緊張したら「マンメンミ（満面の笑み）」 ・ 2-1らしい笑顔 ・ 全力 協力 団結力ががんばるぞ！オー！ <p>が提案された。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 映像の状態が悪く、表情等を観るのは少し難しかったようであるが、「うまく歌えないって言っていたけど、しっかり声がきこえたよ。」「少し下を向いていたから、前を向いて歌えるようにがんばろう。」など、歌声から感じたことや伝わってくることをお互いに伝え合っていた。 ・ 「笑顔」というキーワードを盛り込むのは難しかったようであるが、発表の際は、学級を盛り上げる様々な工夫を盛り込んだ発表が続いた。 <p>ただ、自分たちのグループの考えた発表を言うだけではなく、部活動の応援のように、手拍子をしながら発表をするグループや、応援団のように、大きな声で学級の人々に呼びかけながら発表をするなど、発表後は全員が笑顔になるようなユニークな発表が多かった。</p>
<p>実践化 5分</p>	<p>6 各グループのアイデアを集約し、学級の合い言葉を決定する。</p>	<p>○ 議長が意見を集約し、発表をする予定であったが、時間の都合で6つすべてを採用することで決定した。</p> <p>○ 議長は1つに決定したいと希望していたが、時間の都合でできずに残念そうであった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発表が予想以上に盛り上がり、最後の集約ができなかったことが残念であったが、生徒が話し合いを運営し、自分たちで考え、決定していくことができるようになった姿に、成長を感じた。

⑤ 実証授業における生徒の姿

今回の「コーチングをベースにアクティブ・ラーニングを取り入れた学級活動の試み」の実践を通して、合計5回の話し合い活動に取り組み、今回が5回目の活動であった。公開授業ということで、生徒はとても緊張していたが、目前に迫った合唱コンクールに向けての話し合い活動ということで、実行委員会の時から、一人一人が自分の課題として真剣にとらえ、積極的に意見を交わしていた。

実証授業当日は、議長と班長1名が体調不良のため欠席であったが、日頃の活動を活かし、副議長や書記、代理の班長が円滑に話し合い活動を進めていった。最初は緊張していたよ

うであるが、時間が進むにつれて、これまで培った積極性を生かし、自分たちで活動を盛り上げていく様子が見られた。生徒の記述によると、「合唱コンクールをがんばろうと思った」、「とても意味のある話し合いができた」など、話し合い活動を通して、自己開示することができたり、相手を受け入れることができたりする経験を通して、お互いを認め合うことができるようになりつつあることが窺えた。

(5) 1学期の実践を経ての学級の変容

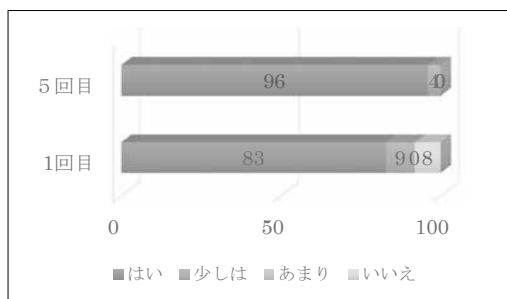
図3～5は1回目と5回目の話し合い活動後のアンケート結果である。生徒の記述回答の中にも、「最初の学活の時よりも、友達の話静静地に聞くことや、自分の意見をはっきり言えることが増えたのでよかった。」「最初は自分の考えを友達につたえることができませんでしたが、新しいグループになったとき、班長になってそこから自分の意見を相手に伝えるようになりました。」など、経験を通して、自分自身の成長を感じられている姿が窺える。

さらに、特筆すべきは、自分たちで決める目標なので、実践に移そうと決意している生徒が多い点である。集団生活を送るためには、数多くのルールがある。しかしながら、それらを実践できずに指導を受けたり、周りが不快に思ったりすることも多くあるが、自分たちでより良くするために決定した事項は、実行に移す意識も高いことが窺える。

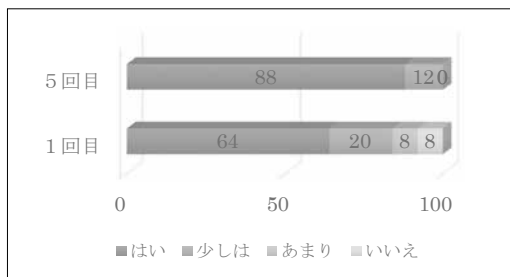
本校では、月別出席率を統計としてとっている。これは、全体の出席日数に対して出席者及び出席日数がどれくらいの割合であることを表す数値であるが、1組は4月から7月の出席率の変動が-0.5であったのに対し、他クラスは-3.4、-7.5と欠席者数及び欠席日数が増加している傾向が見られる。生徒の出席率が安定している要因として考えられるアンケート結果が図6・7である。回答は1～4のポイント制で「そう思う」を4とし、「まったくそうは思わない」を1とした。クラス全員の平均値をプレポストで比べたものである。

4月より7月は、「学級にいと、明るく楽しい気持ちになる」、「この学級の一員でよかったと思う」と回答した生徒が増加した。生徒の意見の中に、「学活の話し合い活動で、仲のいい友

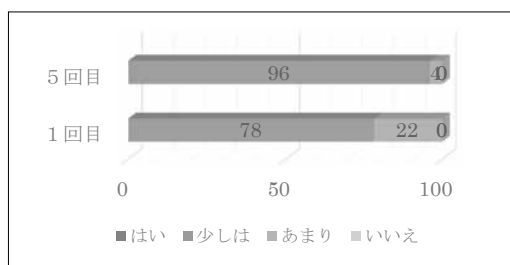
【図3】 今日の学活は楽しく過ごせましたか



【図4】 一緒に取り組んだグループは、よく協力するようになったと感じますか



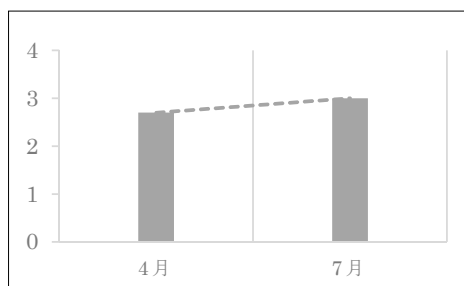
【図5】 今日決まったことを行動に移しますか



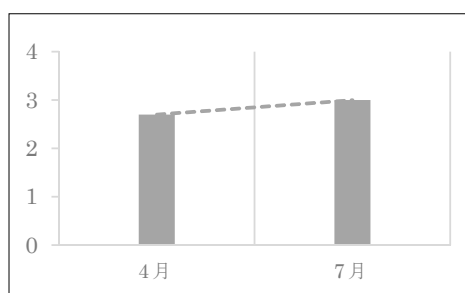
達が増えたことがうれしかった。],「合唱コンクールに向けて話し合いをしたことで, 団結力が高まり, いい合唱ができたと思う。」など, 話し合い活動を通して自分の思いを伝え, 相手の思いを聞くことで学級としてのまとまりが高まってきたことが窺える。

今回の研究を通して, 生徒の成長をたくさん見ることができた。学級開きの頃は, お互いの悪いところを見て指摘をし, 困ったことがあればすぐに教師に相談し解決してもらおうとする姿が多く見られた。しかし, 学活の回数を重ねるごとに, お互いの良い点を認め合い, 困ったことを自分たちの言葉で解決しようとする姿が見られるようになってきた。こうした前向きな言動が学級の雰囲気改善し, 教科担任からも「だいぶ落ち着いてきましたね」と言われるようになってきた。

【図6】「学級にしていると, 明るい気持ちになる」



【図7】「この学級の一員でよかったと思う」



(6) 成果と課題

① 成果

今回の研究を通して, 学活の在り方についてあらためて考えさせられた。中学校学習指導要領解説特別活動編には, 特別活動の目標として, 「よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的, 主体的な態度の育成」と明記されている。しかしながら, 進路指導や生徒指導の効率を求めるあまり, 教師が一方的に学活を進めていくことが多くなっていた。生徒の「よりよい人間関係作り」のためには, お互いで言葉を通して伝え合う活動が必須である。生徒も今までの学活とは違うスタイルに最初は戸惑いをみせていたが, 回を重ねるごとに, 自分たちで学活を進めるのだという意識が高まり, 今までは, 「学活何するんですか?」と問いかけてきた生徒も, 「次の議題は〇〇だよ。」などと, 主体的に学活に取り組む姿勢が見られるようになってきた。また, リーダーを席替えごとに変更することで, 今まで人前で話すことを苦手としていた生徒にも新しい経験をする機会を与えることができ, 自分の新しい一面を発揮して自信をもって日々の活動に主体的に取り組む生徒が増えた。

② 課題

特別な支援を要する生徒への対応がまだまだ不十分なため, 話し合い活動の場面でトラブルが起こることもあった。今後は, 特別な支援が必要な生徒をどのように話し合い活動に参加させるか, 本人及びグループのメンバーへの支援を考えていかなければならない。

また様々な決定事項を, 実行に移す意識は高いが, 実際に行動に移せているかは個人差が大きい。今後はどの程度実行できているかをしっかりと確認させる「評価」も検討していく必要がある。

合唱コンクールでは思ったような結果を残すことはできなかったが、学級の黒板の次の日の目標は「新しい一歩をふみだそう」であった。こうして、自分たちの経験を糧にして前に向かって進んでいく生徒の姿を今後もサポートできるように、生徒の自主性・主体性を育む学活におけるアクティブラーニングの活用と、それを支える担任としてのコーチング技術を一層磨いていきたい。

7 実践事例2

研究対象：鹿児島県立加治木高等学校 3年1組

指導者：瀧山完二教諭

(1) 学級の実態（4月当初）

男子16名,女子23名,計39名の文系選抜クラス。そのうち,2年生から持ち上りの生徒が32名。ほとんどの生徒は,志望校合格を目指し,夢や希望を持って学校生活を送っている。ただ,全体としておとなしい印象であり,文系にしてはコミュニケーション能力が高いとは言えない。また,持ち上りの生徒の中に,1月下旬から全く登校ができなかった生徒が1人いる。新年度最初の2日間は登校することができたが,その後はまったく登校ができず,今後も配慮が必要な生徒である。さらに,新しく選抜入りした7人は相当な不安を抱えており,そのうち2人の生徒の保護者から「子どもが学校に行きたくないと言っている」という電話が学校に寄せられた。このように,一部ではあるがクラスに適応できないと感じている生徒も存在している。

(2) 研究実践の流れ

1	4月17日	構成的エンカウンターによる自己紹介活動
2	5月1日	話し合い活動「学級目標」
3	5月15日	話し合い活動「望ましい人間関係について」
4	5月22日	構成的エンカウンターでの価値判断①「宇宙船での選択」
5	5月29日	サイコドラマ「いじめられる人の気持ちになってみよう」
6	6月12日	人権同和教育「統一応募用紙」
7	7月3日	構成的エンカウンターでの価値判断②「6人の人生」
8	7月10日(実証授業)	話し合い活動「自分の将来設計」

(3) 話し合い活動のためのLHR実行委員会

今回のLHR活動が従来の話し合い活動と異なるのは,全てのLHR活動を生徒自らが企画・運営することと,そのためにLHRを実施する前と後に必ずLHR実行委員会を取り入れたことである。実行委員のメンバーは,総務1名(司会),副総務1名(ノート記録),LHR委員1名(黒板記録),班長6名(班員は,1学期中固定)から構成されている。

基本的に事前の実行委員会の会議は各LHRの前の週の昼食時間に1回か2回,事後のそれはその翌日に実施した。事前の会議では,教師のコーチングの下,各LHRで扱う内容に関して課題提案理由等について議論し,問題の本質の理解を深めた後,生徒自ら討議の柱を検討し,

話し合い活動がうまく進行するかを確認した。事後のそれでは、上手くいったこと、改善すべきことを出し合い、次回のLHRに繋がるようにした。

最初の頃は、実行委員たちは受け身で、こちらが用意した内容に口を挟むことはなかった。しかし、回を重ね、話し合い活動の展開等を理解するようになると、次第に委員自らの力でLHRを創り上げていこうとする態度が見られるようになった。「各班の意見を出し合って終わるのではなく、その後それらの意見に対する質問や反対意見を出してクラス全体で議論を深めるべきだと思います」のようなより高次の展開を探ろうとする意見も出てくるようになった。中でも司会の総務は、「この討議の柱は意見が出にくそうなので、前もって予告しておいていいですか」等、LHRを運営するのは自分たちだという意識を強く持つようになっていった。

(4) 話し合い活動の実際 (7月10日 (月) 7限目 15:25 ~ 16:15)

① 議題 「自分の将来設計」

② 議題について

自分の将来の生き方や生活についてビジョンを持ち、また、それを自らの意志と責任で実現するために進路計画を立て、それを実行しようとすることは高校生にとって極めて重要なことである。そこで、生徒が自身の未来を想像したり、具体的な将来の目標を設定することを通して将来設計について考える機会を持つため、本議題を設定した。

③ 本時の展開結果

過程	活動の内容	生徒の動き・反応	教師の評価
意識化 10分	1 議題提案理由及び「自分は自分の主人公」(東井義雄 作)の朗読を聴く。 2 本時の目標を知る。	・議題提案理由及び詩の朗読を聴き、本時の話し合い活動に主体的にかかわる意欲を高めた。	・議題の価値を理解し積極的に意見を出そうとする意欲を持つことができていた。
	将来の自分の姿を想像し、真に幸せな人生を作るために必要なことは何かを話し合おう。		
追求 30分	3 理想の自分を実現するために必要なもの、また最大の悩みをレディネスシートに記入する。 4 グループで意見を共有し、共通項目を見つける。 5 グループで見つけた共通項目をクラス全体で共有する。	・必要なものとしては、努力・忍耐力・学力・コミュニケーション力等が上げられた。 ・最大の悩みは、最後まで続けられるか、優柔不断なこと等が上げられたが、話し合ううちに、自分で克服できないものはないと感じている生徒もいた。	・ずっと固定の班メンバーで話し合い活動を行ってきたこと、「自分の意見を発言すること」が学級目標であることを全員が意識していたので、活発な話し合いが行われていた。
	柱1 30年後の自分の姿を想像し、その姿を実現するために必要なこと等について考えよう。		
	柱2 真に幸せな人生とはどんな人生か、また、それを作るためのポイントを考えよう。		

	<p>6 幸せな人生とはどんな人生か、またそれを作るためのポイントをレディネスシートに記入する。</p> <p>7 グループで意見を共有し、ポイントについては共通項目をまとめる。</p> <p>8 グループでまとめた共通項目をクラス全体で共有する。</p>	<p>・幸せな人生は、支えてくれる人がいること、幸せな人生を作るためのポイントは、大切な人がいる・思いやりをもつことのように人との関わり（望ましい人間関係）を大切にすることが何よりも大事であると考えている生徒が多かった。</p>	<p>・司会団の3人（司会・黒板記録・ノート記録）が各グループの様子を見て回り、話し合うべき内容等について確認をしたり、助言を与えたりしていた。</p>
<p>実践化 5分</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>柱3 真に幸せな人生を作るためにこれから努力することを決定しよう。</p> </div> <p>9 柱2で出てきたポイントを踏まえ、グループでスローガンを考える。</p> <p>10 グループで考えたスローガンをクラス全体で共有し、クラスの決意スローガンを作る。</p> <p>11 教師の話聞く。</p> <p>12 リフレクションシートに記入する。</p>	<p>・「日々前進」や「一生懸命」というスローガンが出てきたが、既存のフレーズではクラスのオリジナリティが出ていないという意見があり、「日々善進」、「一笑懸命」に変更。最終的に、『日々善進 一笑懸命 with your friends』に決定した。</p> <p>・教師の話聞き、自分の人生ドラマをプロデュースしていくのは自分だという思いを新たにしていた。</p>	<p>・自他のグループにおける意見の相違に着目しながら深まりのある意見交換ができていた。</p> <p>・クラス全体での意見交換を通して、クラス独自のスローガン決定することができた。</p>

④ 実証授業（含：事前の実行委員会）における生徒の姿

今回の実証授業は、1学期を通して行ってきたLHR活動の総まとめであり、公開授業になるということで生徒は全員（特に司会を務める総務は）とても緊張していた。事前のLHR実行委員会では、当日の討議の柱について立案・検討し、流れを確認していった。副総務には当日生徒たちの話し合いへのモチベーションを高めるため、詩を朗読してもらったことになった。



実証授業当日、野球部5名が大会のため公欠となり、そのうち3名は班長だったため、急遽当日の昼休みに、班長代理の3名を含めて実行委員会を行い、話し合い活動の流れを再確認した。日頃活発に意見を言ってくれる公欠の5人に加え、欠席者も2人おり、活気のある議論はあまり期待できないと思っていたが、そのことでかえって生徒たちは自分たち一人ひとりが頑張らないといけないと思ったようである。いつもと変わらぬ話し合い活動が展開されていった。

リフレクションシートの回答も今までの中で群を抜いて良いものであり（10個の項目の

内、8個の項目で全員が「はい」と回答)、今回の話し合い活動が今までの中で最も充実したものだっと感じている生徒が大半であった。教室の前で話し合い活動をずっとリードしてきた3人(司会、黒板記録、ノート記録)の顔は自信と達成感に満ちていた。以下は、リフレクションシートの記述回答からの一部抜粋である。

- いつもより皆はきはきと意見を言っていたような気がします。楽しい話し合いになりました。
- 人生の見方は人それぞれであったが、皆今を頑張ることは共通していた。実りある良い人生を営んでいくために今を頑張っていきたい。
- 自分の意見も発表でき、かつ、人の意見もしっかり聞くことができた! いいスローガンが決まって良かった。一番楽しいLHRだった。

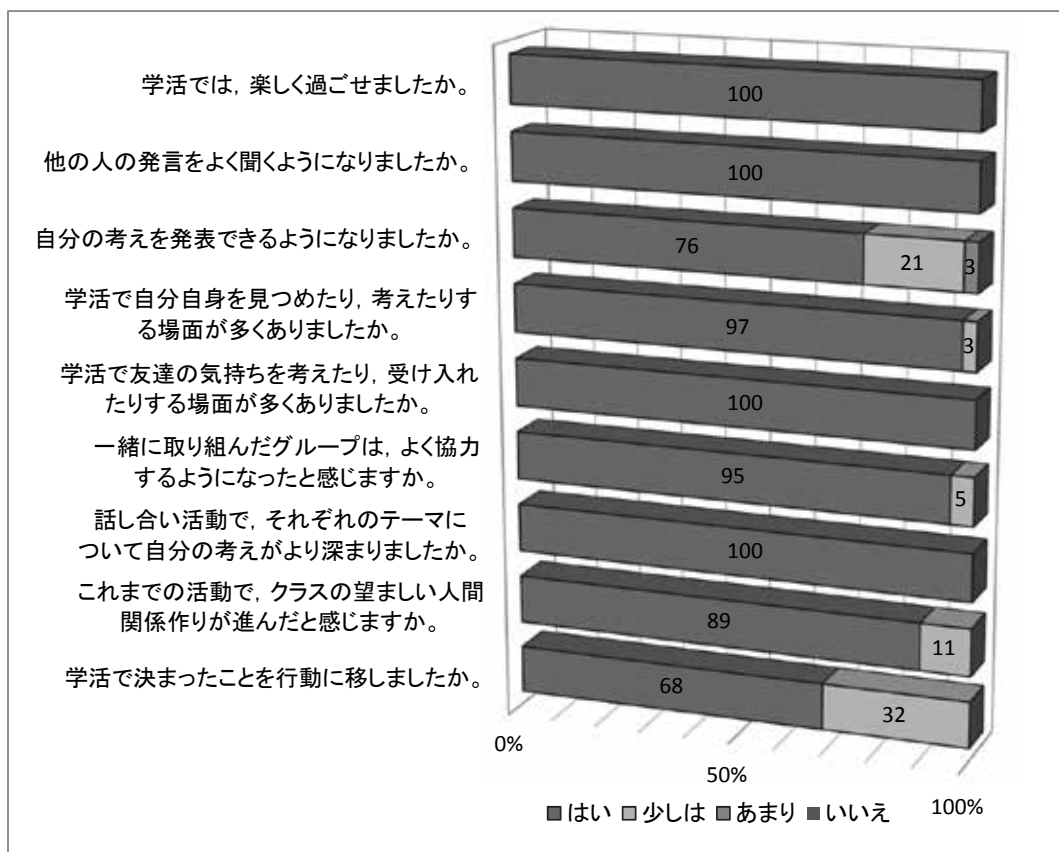
(5) 1学期のLHR実践を経ての学級の変容

前述したとおり、事前・事後のLHR実行委員会を昼食時間に行ったため、司会や班長等を引き受けてくれた生徒たちの時間をかなり奪うことにはなったが、そのことに対する不満の声は一切寄せられなかった。逆に、過去経験したLHRよりもずっと有意義な時間を過ごすことができたという声を聞くことができた。

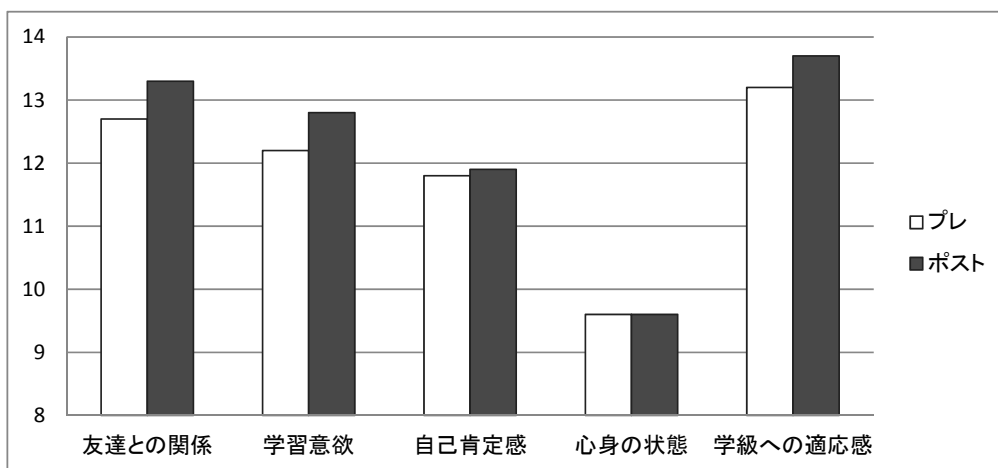
図1は、実証授業の翌日に実施した1学期全体のリフレクションシートの結果である。この結果からも、生徒がLHR活動に満足していることは明らかであり、人間的に成長できたと感じている生徒が多いことが分かる。つまり、正解のない問いに対して、自分なりの答えを考え、それを発表して聞いてもらう。そして他者の考えもしっかり聞く。その一連の過程の中で、自分と他人のものもの見方・考え方の違いに気付き、多様な価値観を認めることができる人間になれたと感じたようである。

4月10日と7月11日の2回に渡り実施した「学校楽しいーと」の結果(図2)からも、生徒の変容を見ることができる。心身の状態を除く全てのカテゴリーで2回目に実施した方が高い平均点が出ている。特に、「友達との関係」、「学習意欲」、「学級集団における適応感」の三つのカテゴリーにおいて高い伸び(0.5ポイント以上)を示している。具体的な項目では、「学級には気軽に会話ができたり、遊びに誘ってくれたりする友達がいる」と「授業中に「できた」「わかった」と感じることもある」の2項目において高い伸び(0.3ポイント)が見られた。ある生徒がリフレクションシートの記述回答で指摘していたとおり、「…クラスも全体的に少しずつまとまりが出てきた。…硬い雰囲気だったのも、だんだんと良い雰囲気になっている」ことを裏付けている。

4月時点では不安を抱えていた新しく選抜入りした生徒たちも、今ではすっかりクラスに馴染んでおり、進路実現を目指してクラス一丸となって自分たちで決めたスローガンどおり「一笑懸命」受験勉強に取り組んでいる。不登校であった生徒も7月中旬から別室ではあるが、登校できるようになってきており、少しずつではあるがクラスとして「日々善進」できている気がする。以下は、4月から新しく選抜入りした生徒たちのリフレクションシートの記述回答か



【図1 1学期のLHR活動全体を通してのリフレクションシートの集計結果】



【図2 「学校楽しいーと」のプレ・ポスト比較】

らの一部抜粋である。

- グループ内で知っている人が一人しかいなかったけれど、学活が終わる頃にはグループ内みんなと話せるようになって本当に良かった。学活の時間に決めた席替えのことも、友達をつくるのに役立っている。
- 最初の頃のグループ活動では、上手にグループの人とコミュニケーションを取れないことが多かったが活動をして行くにつれ、グループ内で自分の意見をはっきり言えるようになったと思う。自分から言い出すことはまだ上手にできないが、そこを改善できたら、もっと人とコミュニケーションをとれるようになると思う。
- 初めてのLHRのとき、全く楽しくなくて上手く自分の意見も発表していなかったけれど、回数を重ねる内に少しずつ楽しくなり、将来のこと、友達のこと、学級のことを考えたりして少しは3-1に愛着が芽生えたとし、改めて自分の将来について考えることができた。今学期クラス全員で考え抜いて決めたことをこれから守りたいと思う。本当に良い時間を過ごせたと思う。

(6) 成果と課題

① 成果

一番の成果は、今回のLHR活動の取組が他教科の授業に繋がったことである。話し合い活動を通して、傾聴・質問・承認の態度を培い、友達との関係・学級集団における適応感を高めることができた。その結果、授業にも積極的に参加するようになり、学習意欲をも高めることができた。学級目標を『発言すれば福来たる～ No pain, no gain. ～』としてからは、全員が一日に一言は授業中に発言をするように心掛けている。教科担任の先生方からも、3年1組の生徒たちは、おとなしいと思っていたが、最近の授業では積極的に参加(発言、板書等)してくれて非常に助かるという声を頂くようになった。LHR活動において培われた学習姿勢が、教科の学習面にも見事に転化していったと言える。教科指導におけるアクティブラーニング(AL)の前に、このようなLHRにおけるALの活用こそ最大の効果を生むということを実感した。

② 課題

課題としては、事前のLHR実行委員会をもっと充実させるべきであったということである。事前の会議の善し悪しがLHRの成否を決めると言っても過言ではない。つまり、実行委員会の中で、LHRの時間にどんな議論が出るかについて予測を立て、それに対する反論や質問を用意する所まで話し合えていないと深まりのある討論はできないということを実感した。今回の一連の実行委員会では、主に討議の柱を検討し、うまく活動が流れるようにすることに焦点を当てていた。故に、一見上手く進行はするけれども、そこには必ずしも矛盾や意見の対立のある展開のある話し合いへと発展するレベルまでは届かなかった。実行委員会においてもっと議論を尽くすべきであった。

2学期からのLHRではこのような課題に留意しながら、生徒同士が意見をぶつけ合い、

その中から次々と新しいものを発見し、学級全体や個人を変革していくような活力あるLHR活動を展開していきたい。

8 結果と考察

- ① 本研究を通して、中学生の場合は、話し合い活動にあまり慣れていないことから、手順を十分に訓練する段階が必要であるということと、アサーション・トレーニングを取り入れて、適切な自己主張の仕方等についてのインストラクションが必須であると感じた。また一方で、新学級の開設当時には、温かい人間関係を構築するための支援策として、構成的グループエンカウンターエクササイズを取り入れ、他の生徒と心の触れあいをもつことによって、集団のメンバーの相互理解や信頼関係をより深める体験学習を取り入れたことは有効であった。
- ② 教育コーチングを取り入れ、教師が傾聴、質問、承認の姿勢を大切にすることで、生徒たちが自律する方向で活躍するようになり、特に事前の学活（LHR）実行委員会ではリーダー養成に効果があった。ただ、コーチング姿勢を重視するあまり、話し合い活動本番で、適切なタイミングで成されるべき教師からの助言が少なくなりすぎたことは反省の余地がある。
- ③ 事前の学活（LHR）実行委員会での討議の柱決めやそのための深い議論、話し合いの流れに対する事前の深い洞察に教師はもっと意を用い、よりよいリーダー養成と生徒が企画運営する学級活動（LHR）創りの手助けを更に努力したい。そのことが、話し合い活動の質を決めてしまうからである。
- ④ 中高における両研究実践で、仮説を実証するデータがある程度出て、一応の成果があったと思われる。また、アクティブ・ラーニング型の学級活動（LHR）を1学期間経験した生徒達が、自分たちの学級に対してより心の居場所を感じる望ましい人間関係づくりに成功したことが窺える。また、教科学習における対話力や発言力の向上に転化している様子が見て取れたとの担任教師からの報告は本研究のもう一つの大きな成果であろう。

9 まとめ

中央教育審議会答申は、「特別活動は、教育課程全体の中で、㉗特別活動の各活動において資質・能力を育む役割だけでなく、㉘学級活動を通じて学級経営の充実が図られ、学びに向かう学習集団を形成することや、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を特別活動の中で実践的な文脈で用いることによって、各教科におけるより「主体的・対話的で深い学び」の実現に寄与する役割や、㉙教育課程外も含め学級・学校文化の形成等を通じて学校全体の目標の実現につなげていく役割を担っており、これらをバランスよく果たすことが求められる。」と述べている。今後、ますますこのようなアクティブ・ラーニング型の学級活動（LHR）が展開され、生徒達が主体的・対話的で深い学びを生徒が自ら「なすことによって学んでいく」、より質の高い特別活動にしていかなければならない。

これからの21世紀を生き抜く逞しい若者の育成は、自ら挑戦し、失敗から学び、困難を乗り

越えて主体的・協働的に学び続け、成長していける学習者を学級活動（LHR）を通して育てることであり、それが確かな学力を育む学級経営の方向でもあると思われる。今後、教科指導でのアクティブ・ラーニングも進展してほしいが、その前に、最もアクティブ・ラーニングに取り組みやすい領域こそ学級活動（LHR）であることに気づき、教師としてのあり方を変えて、勇気を持って授業改善に取り組みたいものである。

参考文献

- Charles C. Bonwell, James A. Eison. Active Learning: Creating Excitement in the Classroom (J-B ASHE Higher Education Report Series (AEHE)) Jossey-Bass 1991.
- 天笠茂 『速達速効！改訂学習指導要領×中央教育審議会答申（中学校編）』 第一法規 2017年
- 国分康孝, 片野智治 『エンカウンターで学級が変わる 中学校編—グループ体験を生かしたふれあいの学級づくり』 図書文化社 1996年
- 国分康孝, 国分久子, 片野智治 『エンカウンターで学級が変わる〈Part2〉中学校編—すぐできる！実践エクササイズ集』 図書文化社 1997年
- 国分康孝, 片野智治, 加勇田修士, 国分久子, 岡田弘, 吉田隆江 『エンカウンターで学級が変わる 高等学校編』 図書文化社 1999年
- 小山英樹, 佐々木喜一 『子どもの心に届く言葉, 届かない言葉 —教師力・親力をアップする教育コーチング—』 学習研究社 2008年
- 鈴木建生 「学習者の幸福を追求する授業実践」, 小山英樹, 峯下隆志, 鈴木建生 『この一冊でわかる！アクティブラーニング』 PHP研究所 2016年
- 佐藤学 「学びの対話的实践へ」, 佐伯胖, 藤田英典, 佐藤学 『学びへの誘い』 東京大学出版会 2003年
- デイヴィッド・W. ジョンソン, イデッサ・ジョンソン, ホルベック, ロジャー・T. ジョンソン 『学習の輪—アメリカの協同学習入門—』 二瓶社 1998年
- 松下佳代, 京都大学高等教育研究開発推進センター編著 『ディープ・アクティブラーニング』 勁草書房 2015年
- 溝上慎一 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂 2014年
- 安永悟 『実践・LTD話し合い学習法』 ナカニシヤ出版 2006年